

《研究ノート》

ハンガリーのローマ帝国
— ブダペスト市内のローマ遺跡について —

南 川 高 志

1

この小論は、ハンガリーの首都ブダペスト市内に残るローマ時代の遺跡と、それに関わる古代史を紹介しようとするものである。

今日のブダペスト市は、ドナウ川を挟んで向かい合うブダとペストの2市が1873年に合併して出来たものであるが、ローマ人がこの地域を占領して支配した2千年近く昔、ローマ軍の正規軍団要塞と民間人の居住地は、旧ブダ側であるドナウ川西岸、現在のオーブダ（旧ブダ）地区にあった。ブダペストの観光名所となっている王宮の丘からは少し北である。ローマ時代、現ハンガリー地方は属州パンノニアとして帝国の支配に組み込まれ、紀元106年には皇帝トラヤヌスが属州パンノニアを上（Superior）と下（Inferior）に2分した。現ブダペストの地にできたローマ人の拠点は、属州下パンノニアを統治する属州総督の所在地であり、アクインクム（Aquincum）の名で呼ばれ、最盛時には6万人の人々が暮らしたと想定されている。

ブダペスト市内には、現在「ハンガリーのポンペイ」と呼ばれるアクインクム遺跡考古学公園をはじめ、市内にローマ支配の跡を偲ばせる遺構があちこちに存在する。この小論では、それらを概観しながら、ローマ時代のこの地方の歴史を眺めて見ようと思う。

ところで、ハンガリーの古代史学界については、ローマ史の方がギリシア史よりも研究が盛んであるように思われるが、それは同国の歩んだ歴史から見て当然であろう。ハンガリー出身のローマ史研究者としては、アメリカ合衆国で活躍したアンドレアス・アルフェルディ（Andreas Alföldi）や、ドイツ、ハイデルベルク大学で教授を務め、『ラテン碑文集成』編集など、碑文学を基礎としたローマ史研究で大きな業績を上げたゲーザ・アルフェルディ（Géza Alföldy）など、ハンガリーから外に出た学者がすぐ思い浮かぶが、ハンガリー国内で研究し、ドイツ語でも多くの叙述をおこなって、欧米に広く知られたローマ史研究者が少なからずいる。なかでもモーチ（András Mócsy）は、弓削達教授をはじめとする日本人研究者によって夙にその業績が引用されてきた。私自身にとっても、『パウリ古典古代学大事典』第9巻所収の大論文Pannoniaや英語訳された著書*Pannonia and Upper Moesia* (London, 1976) などのモーチの業績は、マルクス・アウレリウス帝治世に生じて属

州パンノニアを混乱させたマルコマンニー戦争を研究していた大学卒業論文作成時から、大切な参考文献であった。ハンガリーのローマ史、ローマ考古学の研究は、この地域がローマ帝国の外部世界との国境地帯であったために、軍事史をテーマの核とするものが多いが、ローマ帝国の支配がこの地域をいかに変えたかという論点に関わることも多い。モーチの研究は、ローマ支配の浸透や性格を考える際にも有効な実証研究の例として、わが国では利用価値の高いものとされてきたように思われる（モーチは1987年1月20日に物故）。

しかし、ハンガリーの古代史・考古学界には、古くからハンガリー語による研究蓄積があって、西ヨーロッパの言語による長い要約が付された*Budapest Régiségei*など定期刊行物も早くから創刊されている。とくに考古学の領域では、ハンガリー語による発掘報告が実に数多い。従って、考古学的な説明を必要とする際にはハンガリー語の文献を消化しておこなうべきであろうが、私はハンガリー語を読解できないので、以下では西ヨーロッパの言語で書かれた文献を参考に執筆するに留まる。これは小論の大いなる欠陥であって、近い将来、ハンガリー語を解する日本人研究者によって、この欠陥が改められることを期待する。

ハンガリー語を解さないのにこうした研究ノート執筆するについては、少々決断を必要とした。私は、四半世紀ほど前に、科学研究費補助金の共同研究プロジェクトの分担者として、現ルーマニアに相当するローマの属州、ダキアの研究をおこない、簡単な報告書を書いたことがある。しかし、その報告書は、ルーマニア語を読解できなかったために、コンスタンティン・ダイコヴィッチやハドリアン・ダイコヴィッチらのルーマニア語による研究文献を読んでおらず、ただ英・独・仏語によって執筆された文献から情報を集めて書いたレポートであった。そのために、レポートをその後学術雑誌に掲載するような論文・研究ノートへと発展させることはできなかった。今回、古代のブダペストの話を書くにあたり、ハンガリー語を解さないことが一番の弱点となった。

しかし、中東欧地域の古代史については、わが国では依然としてあまりに情報が少なく、小論で紹介するアクインクム遺跡についても、管見の限り、ローマ史の専門家が関わったものとしては、弓削達編『世界の大遺跡6 ローマ帝国の栄光』（講談社、1987年）にわずか2頁、3葉の写真と若干の説明が付されているのを見る程度である。それゆえ、西欧言語による研究をふまえただけのものにはなるが、自身の遺跡観察とあわせて解説することが、日本の学界の現状では多少貢献することであろうと考えた次第である。

周知のように、冷戦終結後、東欧地域の変化は急で、バルカン地方とあわせて、EU加盟を求めて、あるいは西欧諸国からの資金援助獲得を目指して「ヨーロッパであること」（European Identity）を強調しようとする動きが見られる。このことは古代史とも無縁ではない。資金援助を目的として古代ローマ遺跡の保護を始めた国もあるとの報道もなされているほどである。何をもって「ヨーロッパであること」とするか、という点で、ローマ帝国の過去は深い関わりを持っている。こうした点から、中東欧バルカン地域の歴史は、近

現代だけでなく、古代史、中世史も注目されてよいのではなかろうか。小論は、こうした問題関心からなされるべき研究にも若干の貢献をすることを意図している。

さらに、ローマ史に関する遺跡紹介がわが国の西洋古代史学界で蓄積されてゆくことを願っていることも、小論執筆理由の一つである。遺跡訪問の紀行文は古くからあるが、ギリシア史やヘレニズム時代史に比べて、ローマ史の領域では、学界動向を踏まえた立ち入った遺跡紹介が、ポンペイなど特殊な遺跡を別にすれば、ほとんどないといってよい。21世紀初頭の今日、整った遺跡や博物館についてはホームページが開設されているケースが多いことは承知している。日本にいながらにしておおよその様子を知ることが可能なのである。今回私が訪ねたブダペストについても、アクインクム博物館のホームページ(<http://www.aquincum.hu>)の英語による説明で、ブダペスト市内の遺跡のざっとした解説を写真付きで見ることができる。しかし、遺跡管理者の側の説明をただ読むだけでなく、実際に外国人の目で遺跡を見、かつ遺跡や遺物がその国の人々によっていかに保存・管理、さらに鑑賞されているのかという点まで観察することが大事である。訪ねた上での、学界動向を踏まえた遺跡訪問の報告が蓄積されることが、依然として必要と思われるのである。今後わが国の西洋古代史学界でそうした報告が蓄積されてゆけば、西洋古代史研究者のみならず、他の分野の研究者も裨益することは間違いないであろう。

2

すでに述べたように、現在のブダペスト市は、北から南へと流れるドナウ川を挟んで西岸のブダと東岸のペストに分けられ、ローマ人の要塞や民間人の居住地は、ブダ側にあった。現在の市の中心部から見一番北にあるのが、考古学公園として整備されており、立派な博物館もある遺跡で、かつて民間人が定住したところである。ここを、以下小論では民間人居住地と呼ぶことにしたい。この考古学公園内部にあるアクインクム博物館は、1894年の開館である。ブダペスト市内の古代の本格的な発掘作業が始まったのが1880年代で、出土物を収めるためにまもなく古代の神殿風の博物館ができた。現在この最初の博物館は使用されず、敷地内の別のところに新しい博物館が開館している。さらに、考古学公園の敷地のすぐ外側には、民間人居住地の人々のための円形闘技場の跡が残っている。

(写真1) アクインクム博物館とその周辺の遺跡



(写真2) 民間人居住地近くの円形闘技場



この民間人居住地から3キロメートルほど南の地一帯に、正規軍団の要塞跡がある。また、この要塞の周囲に集落、ラテン語でいうcanabae legionisが発達し、きわめて広い範囲に拡大・発展した。このcanabae legionisをこの小論では**要塞関係集住地**と呼ぶことにする。要塞の遺跡や要塞関係集住地の遺跡は民間人居住地ほどまとまって整備されてはおらず、散在しているが、最もよく保存されているのが、正規軍団要塞の大浴場（Thermae Maiores）の遺跡である。規模が大きく、また、近代の発掘の初期から知られてきた遺跡でもある。さらに、要塞関係集住地にも円形闘技場が作られていて、その遺跡が当時の見せ物の規模を想像させるに十分なほどよく残っている。こちらの円形闘技場の方が民間人居住地近くの円形闘技場よりも大きい。要塞関係集住地内にはかなりの規模の邸宅跡も残されており、モザイク画などが出土している。

見応えのある遺跡、再現や保護が丁重になされている遺跡は、上に述べた以外では、ヘルクレスを描いたモザイク画が見つかったために「ヘルクレス・ウィッラ」と呼ばれている邸宅の遺跡がある。民間人居住地と正規軍団要塞とのちょうど中間点くらいに位置しているが、要塞関係集住地の外側であった。

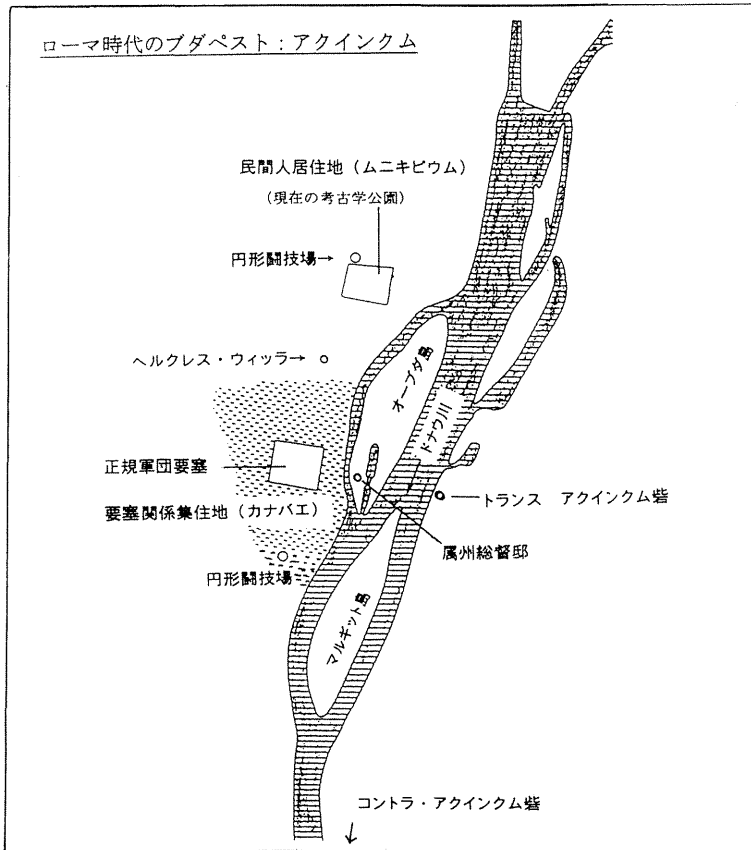
他の遺構はみな小規模である。王宮の丘より南でドナウ川をペスト側へ渡ったエルジェーベト橋のたもと、3月15日広場と呼ばれる場所の一角に、コントラ・アクインクムの砦遺跡がある。ここからペスト市が発展したと一般に解説されるが、ローマ時代はごく小さな要塞に過ぎない。ペスト側には、河岸にトランスアクインクムの砦もあったが、現在はあまり見るものはない。さらに、要塞関係集住地あたりから東へ、ドナウ川を渡った中の島（オーブダ島）に、属州総督の邸宅が作られていて、相当に大規模な屋敷（敷地は120メートル四方の広さ）で、部屋数は100以上あったことがわかっているが、発掘後埋め戻されて、現在見学できるものはない。

(写真3) コントラ・アクインクムの砦の遺跡



ブダペスト地区のローマ時代の出土品は、民間人居住地の遺跡公園にあるアクインクム博物館に重要なものが展示されているが、ペスト側にあるハンガリー国立博物館にも価値の高い展示品がある。とくに、ローマ時代の数多くの碑文が1室を丸ごと使って展示されており、ミトラ神崇拝が分かるような展示もなされている。王宮の丘のブダペスト歴史博物館も訪れる価値のある博物館である。

(地図) ローマ時代のブダペスト



ところで、上に述べてきたところからわかるように、古代のブダペスト、アクインクムは、民間人居住地と要塞関係集住地という、民間人の定住した場所が2カ所あった。ローマ軍が辺境地帯を征服して軍を駐屯させると、軍の要塞の周辺に民間人の定住地、すなわちカナバエができ、やがてこのカナバエが都市的集落に成長して、ムニキピウム（自治市）の法的特権を得、さらに発展するとコロニア（植民市）の法的格を得ることとなった、と一般にローマ史の研究書や論文では説明される。このアクインクムについても、後述するように、124年にハドリアヌス帝からムニキピウムの、194年にはセプティミウス・セウェルス帝からコロニアの権限を得ている。しかし、都市アクインクムでは、同じ定住地がそのまま発展して法的権限を次々と得ていったというわけではない。最初のムニキピウムは補助軍要塞の近くに発展した民間人居住地に与えられたが、民間人居住地の南方に出来た正規軍要塞のカナバエ、すなわち要塞関係集住地は独自に都市的運営を發展させ、まもなく民間人居住地を凌ぐ富と広さを持つに至る。コロニアについては、民間人居住地だけでなく、要塞関係集住地を含めて与えられたものである。やがて、民間人居住地は重要性を

失って、最終的には人々は要塞関係集住地に移動していったらしい。

かつて、弓削達教授は、他の共同体を巻き込み解体するローマ帝国の影響力の大きさを論じ、とくにムニキピウムが多数できていったことが原住民の共同体に影響を与えていったことを述べる際に、1970年代前半の研究に依拠しつつ、このアクインクムを例として取り上げている（弓削達『地中海世界とローマ帝国』岩波書店、1977年、119ページ）。そして、ムニキピウムの発展が「原住民」エラウイスキー族（Eravisci）（「」は南川）の共同体の分解を速めたと述べている。しかし、ラテン語碑文から判明する市民権の保持や土地所有関係と、考古学的な研究の成果が明らかにするアクインクムの生活環境との間にはずれがあるように思われる。エラウイスキー族の実態を明確にできない限り、はっきりした答えは望めないが、ムニキピウムとなったアクインクムの民間人居住地の発展は、2世紀後半のマルコマンニー戦争で打撃を受け、以後、アクインクムの中心は要塞関係集住地に移動してゆく。民間人居住地の繁栄はごく短期間に過ぎない。要塞関係集住地の方も、3世紀後半に一度外部からの攻撃で被害を受けるなど、順調ではなかった。そうしたローマ人の集住地が、先住民の共同体に実際にどのような影響を与えたのかは、慎重に考える必要がある。そもそも、「カナバエ → ムニキピウム → コロニア」という図式は、あくまでもローマ側の都市の法的権利に着目しただけの議論に過ぎず、現地の実態はもっと複雑であったと想定しなければならない。

ローマ帝国が、征服し支配下に置いた人々に対して大きな影響を与えたとする前提を取り除いてみると、実はこうした帝国辺境での実態、従来図式化されて説明されてきたようなローマ人の支配の発展は、それほど明快に説明できるものではないかもしれない。「ローマ化」も、ローマの偉大さという前提の下で研究を進めたヨーロッパの学界の伝統に拠った解釈や概念に過ぎない。小論にはこうした見方を具体的に反証するほどの準備はないが、地中海から離れた地域でのローマ人の活動と先住者の反応とを丁寧に見直してゆくならば、ローマ帝国の「限界」、それ故の研究上の新たな問題を将来明らかにできるかもしれないと密かに期待している。

3

現在のハンガリー地方に相当する地域をローマ人が征服しにかかったのは、初代皇帝アウグストゥスの治世（前27年～後14年）である。そして、第4代クラウディウス帝の治世（41年～54年）に、今日のブダペスト市の位置する地域にローマ軍が到達した。

最初期の軍の砦がドナウ川に沿って築かれていったが、その位置などが今日すべて判明しているわけではない。その一つが、アクインクムの南方、ドナウの下流方向の河岸に位置する今日のAlbertfalvaに築かれた要塞であった。Albertfalvaは、アクインクムとドナウ川のさらに下流にあるNagytétény（ローマ時代のCampona）の要塞との間に位置しており、

国境線防衛上、重要な役割を担っていたらしい。発掘報告によれば、トラヤヌス時代（98～117年）に石造の要塞となり、190メートル×210メートルの大きさであった。今日では、この要塞は、防壁や要塞の周りの民間人居住地の跡が少々見られるだけにすぎないが、工房跡などが発見されていて、500人規模の補助軍団の駐屯地として大いに機能していた時期があったことをうかがわせる。

現オーブダ地区、アクインクムの地に最初に砦が作られたのは73年頃のことと考えられている。初期に駐屯していた部隊の名が兵士の墓碑から判明している。すなわち、クラウディウスの治世の50年頃からウェスパシアヌス帝治世（69年～79年）の初めまで、Ala Hispanorum I（CIL III, 10514；15163やAn. Ép. 1937,216より）が、ウェスパシアヌス帝治世から、その2子、ティトゥス（位79年～81年）、ドミティアヌス（位81年～96年）の治世の80年代までAla I Hispanorum Auriana（CIL III, 14349,8；14348,1より）が駐屯した。すべて補助軍団である。

ところで、すでに前章で触れたように、ローマ人が到来する前、ブダペスト地域には「ケルト系」とされているエラウイスキー族の共同体が存在していた。エラウイスキー族は、この地に太古からいたわけではない。彼らは、「ケルト」系住民の拡大で、ここに移ってきたのである。一般にパンノニア地方の「ケルト化」は紀元前4世紀に始まったとされ、ドナウ川に近い北部パンノニアには、アザリ族（Azali）とエラウイスキー族が居住したといわれてきた。実際の発掘で、ラ・テースBおよびC期の出土物が見つかった。ただ、エラウイスキー族が「ケルト系」であるというのは、1960年代の研究でようやく確認されたに過ぎない。

彼らは、紀元前90年代から前70年代にかけて発行されたローマのデナリウス銀貨を真似た銀貨を作っていた。この貨幣が、前35年以来、パンノニア地方で広く流通していたことに起因するらしい。[E]RAVISと部族の名を刻した貨幣を、ブダペストの博物館のいくつかで見ることができる。エラウイスキー族の中心的な居住地（オッピドゥム）は、現在の市の中心部といってよい王宮の丘よりもさらに南に位置する、ゲレルトの丘の南斜面にあった。ローマ軍は征服後、この人々をオーブダ他、いくつかの地域へ分けて移住させた。彼らはローマの法的規定では外人共同体（civitas peregrinae）とされたが、ローマ人との間で友好的な関係を築き、紀元1世紀末のネルウァ帝治世（96～98年）には、族長（princeps）で「マトゥマルスの息子」フロルスにローマ市民権が与えられている。しかし、こうした法的な証拠から、エラウイスキー族の共同体が、ローマ支配によって次第に変質・分解したといえるかどうかは疑問である。実際、「ケルト」系に特徴的な多角形の神殿的建築物が最盛期のアクインクムでも見られるなど、アイデンティティの保持を示す証拠に困らない。ローマの実質的な影響力の如何は、考古学的な知見を動員しつつ、改めて精査する余地が充分ある。

紀元1世紀後半、ウェスパシアヌス帝治世に、ドナウ沿岸全体にわたって新しいローマ

の要塞が築かれていった。現オーストリアのカルヌントゥム基地もこの時築かれている。オーブダの地に新しい要塞が出来たのも、こうした戦略の一環と考えられている。最終的にアクイנקムの地に永続性を持つ要塞が出来ることになる動きの最初が、この時期の活動である。オーブダの最初の要塞は73年頃に建てられたことが碑文より判明するが、その要塞の遺構も発掘で明らかになっている。この時築かれた補助軍の要塞は、2世紀の後半まで維持された。補助軍団のAla I Tungrorum Frontoniana が要塞建造にかかわったようである。トゥングリ族の騎兵であり、西方から来たことになる。この部族の歩兵隊は、これより少し後、80年代に、北部イングランド、ハドリアヌスの長城に近いウィンドランダの補助軍要塞にも派遣されている。

ウェスパシアヌスの次子、ドミティアヌス帝の治世になると、ダキアをはじめドナウ沿岸の国境線がたいへん動揺する。ローマ軍はトラキア系のダキア族、ゲルマン系クァディ族やサルマティア系の諸部族の侵攻と戦わねばならなくなった。オーブダ地域では、この時期、他にも補助軍要塞が築かれた。

オーブダの最初の正規軍の要塞が建造されたのは、ドミティアヌス帝治世の半ば、89年のことであった。この地に駐屯していた正規軍はLegio II Adiutrixである。この軍団は、トラヤヌス帝の征服戦争のために一時派遣され、その間はLegio X Geminaがこの地に配置されたが、やがてLegio II Adiutrixは帰還した。そして、その後二度の一時派遣を別にして、この軍団はローマ支配の最後までこの地にあった。最初に構築された正規軍要塞は、珍しいことに菱形をしているとされているが、まだ十分解明されていないので、この珍しさにも留保が必要であろう。

トラヤヌス帝治世（98年～117年）、ドナウ北方のダキアがローマの属州となって、長年のドナウ国境地帯の不安定さはようやく解消された。106年には属州パンノニアが上下に二分されたが、アクイנקムは下パンノニアでは唯一の正規軍の要塞であり、属州総督の所在地となる。続くハドリアヌス帝治世（117年～138年）の124年頃、この正規軍要塞よりも北に位置する民間人居住地に、ムニキピウム（自治市）の地位が与えられた（Municipium Aelium）。ハドリアヌスは即位前、トラヤヌス帝から属州総督としての勤務先にこの属州下パンノニアを与えられたことがあった。分割後に属州下パンノニアとなって最初の属州総督がハドリアヌスなのである。このことも、ムニキピウムの地位付与に関係しているであろう。

ハドリアヌス帝治世には、最初の正規軍団の西側に石造りの新しい要塞が造られた。この時の施設の配置は3世紀末から4世紀初めころまで、そのままであったようである。アクイנקム博物館所蔵の一碑文によれば、この要塞はアントニヌス・ピウス帝治世（138年～161年）の145年、石造りで建てかえられた。駐屯するLegio II Adiutrixが建造したことになる。

この時、要塞関係集住地の南端部に、円形闘技場が造られた。観客席の基礎構造はUの

形をした24のブロックによって造られていて、現在それがよく分かる形で保存されている。楕円形の長軸131メートル、短軸107メートル、アリーナ部分は88メートルと66メートルの規模で、民間人居住地近くの円形闘技場より大きい。1万から1万3千人を収容したらしい。内側の壁が2.5メートルほどの高さで残されているが、元来は4メートルあったと考えられる。この高さは、観客を見せ物の野獣から守るためである。

(写真4) 要塞関係集住地の円形闘技場



この円形闘技場遺跡の広い敷地は、現在格好の催し場になっており、私自身が訪ねた折も、若者たちのコンサートなど催し物が開かれていた。ヨーロッパに残されている円形闘技場跡は、南フランスのそれのように、現在闘牛に使われているものもあるが、催し物、とくにコンサートに使われることが多い。私が訪ねた遺跡でも、ドイツのクサンテン、スイスのアヴァンシュなどで「ロック・イン・アリーナ」などが開かれていた。ただ、ブダペストの2つの円形闘技場には、壁の落書きが目立った。要塞関係集住地の散在している遺跡にも落書きが見られた。落書きはここブダペストに限った問題ではないが、民間人居住地の円形闘技場にはゴミが散乱しており、近くの考古学公園ほど管理が行き届いていない。同じようなローマ帝国辺境の遺跡をイギリスやドイツで見てきた私は、残念ながら遺跡の保存・管理の点で大きな違いを感じざるをえなかった。

次に、正規軍団要塞とその遺跡、そして要塞関係集住地の説明に移りたい。

第2期の正規軍団要塞には、司令部、指揮官宿舎、高級将校宿舎、一般兵舎のほか、病院 (valetudinarium)、倉庫 (horrea)、商店、工房があったようで、現在は要塞の門の遺構や将校クラスの住居の一部などが見学可能な遺跡として残る。要塞内の兵舎等の配列は、しばしば用いられるHarald von Petrikovits (*Die Innenbauten römischer Legionslager während der Prinzipatszeit*, Opladen, 1975) の分類では第2型の「カエルレオン型」に分類され、イギリス、ウェールズ地方のカエルレオン要塞の他、スコットランドに残る正規軍団要塞跡 Inchtuthilやオーストリアのカルヌントウム、さらにラウリアクム (Lauriacum ウィーン西方のドナウ河畔 現Lorsch) の要塞と同じである。

(写真5) 要塞の大浴場の遺跡



特筆される要塞施設として大浴場 (Thermae Maiores) がある。要塞内の南東部分に位置し、大きな道路が交差しつつ走る橋梁の下ではあるが、要塞施設の中では現在最もよく保存されているといってよいであろう。この大浴場は、1778年の最初の発掘時に見つかり、いくつかの保護措置をした上で一般公開された。最初の発掘の責任者であるペスト大学教授István Schönvisnerが、発見の年にラテン語で発掘に関する報告を公にしている (*De rudibus laconici caldariique Romani*, Budapest, 1778)。彼は、現在のオーブダの地に正規軍団要塞があったことを強調し、それに続けて発掘もなされた。しかし、正規軍団要塞の本格

的な発掘は、民間人居住地の発掘よりも遅れて、20世紀の前半になってから始まった。

この要塞内の大浴場は、広さがおよそ120メートル×140メートルあった。一番北側に柱廊が東西に走り、その南側が広い体育場 (palaestra) と見られる。体育場の南側に、中央部に冷浴室 (frigidarium) が南北に2室、その両側に脱衣室 (apodyterium) があり、さらにその南側には4室、微温浴室 (tepidarium) が設置され、一番南側に高温浴室 (caldarium) が設けられていた。床下暖房の仕組みなどがよく復元されている。

正規軍団要塞の周囲に発展した集住地は、2世紀のうちに急速に規模が大きくなり、遺構からも明らかにその富が民間人居住地を凌ぐようになっていったことが判明している。最盛期、属州総督の邸宅はドナウ川の中の島にあったが、統治機能の多くは、要塞に近いこの集住地へと次第に移動したと考えられている。A・モーチはかつて、この要塞関係集住地が独自の行政をやめて、ムニキビウムの地位を得ている民間人居住地に吸収されるような形で、2世紀末にコロニアを得る単位となったように考えたが、実際はおそらくその逆で、民間人居住地の方が吸収されたと考えた方が、その後の展開から見て正確であろう。

ただし、現在、要塞関係集住地で最もよく維持・復元されているのは、先に述べた円形闘技場だけであって、民間人居住地のように、町の繁栄を想像できるような状態で要塞関係集住地が残されているわけではない。

2世紀後半になると、マルクス・アウレリウス帝治世 (161～180年) に生じたマルコマンニー戦争で、パンノニア地方は大きな被害を受けた。しかし、2世紀の終わり、セプティミウス・セウェルス帝治世 (193年～211年) には、要塞は改修されている。明らかに皇帝の来訪のためであった。セウェルス帝治世初期の194年、アクインクムはコロニア (植民市) の格を得ている (Colonia Aelia Septimiaとなった)。セウェルスは、周知のように北アフリカの出身ながら、パンノニア駐屯軍の力を背景に皇帝位へ登りつめた人物であり、自らの力の基盤をよく理解し、恩恵を与えたと考えてよからう。この時期のものと推定されているミトラ神殿の遺構が発見されているが、これが元老院議員身分の高級将校の宿舎の中に設置されていた点は目をひく。

この時期にアクインクムと同様にコロニアに昇格したのは、パンノニアではカルヌトゥムだけである。多くのムニキビウムはそのまま、この地方で次にウィミナキウム (Viminacium) がコロニアの格を得たのは、ようやく3世紀前半のゴルディアヌス3世治世 (238～244年) になってからである。アクインクムが、コロニア昇格時に「イタリア権」 (ius Italicum) まで与えられたかどうかは分かっていない。しかし、セウェルス朝期 (～235年)、アクインクム地方は経済的に繁栄していたことは間違いなさそうである。214年には、セウェルス帝の子カラカラ帝も、この地を訪れている。当時、町の中心は明らかに民間人居住地ではなく、要塞関係集住地の方に移っていた。

ところが、この繁栄は260年にクァディ族とサルマティア系の諸部族とがパンノニアに侵攻したことによって生じた戦いで一挙に崩壊し、アクインクムは大きな被害を受けた。

正規軍団要塞のほとんど全部の建物が再建されねばならなくなってしまう。かのアンドレアス・アルフェルディが1943年に公刊している1 奉献碑文 (*Budapest Régiségei* 13, 1943, pp.35-43 & 489-493掲載) により、260年の戦争以後使用できなくなっていた浴場が、268年に再建されたことが判明している。他に、城門や食堂なども再建された。

3世紀の混乱を收拾したとされるディオクレティアヌス帝 (位284~305年) は、その属州システムの改変で、属州下パンノニアを2分割して、属州ウァレリアと属州パンノニア・セクンダとし、アクインクムは属州ウァレリアの中心となったが、民政と軍政が分離されたため、軍事を司る将軍 (dux) がアクインクムに駐在した。

4世紀、コンスタンティヌス大帝の治世 (306~337年) には、要塞も要塞関係集住地もそれまでとは様相を一変する。それまでの要塞の東側、ドナウ川との間に、新しい要塞が建てられた。720m×300mの広さがあって、防壁も3mの厚さを持ち、それ以前のものより2倍となっている。かつての要塞の東側の道路だったものが、新しい要塞の主要道となった。これにあわせて、浴場も大きく豪華となった。一方で、旧要塞の西の部分は放棄されている。

4世紀の後半になると、パンノニアへの外部からの圧力はますます強くなる。ウァレンティニアヌス帝治世 (364~375年) にはまだ要塞の工事がおこなわれたようであるが、この皇帝の死後には北側部分は使われなくなった。377年にゴート族が属州パンノニアに入るようになると、元の住民はパンノニアから脱出するようになった。パンノニアの地におけるローマの支配が終わりを迎えたのは433年と一般にみなされているが、要塞の防壁の一部は中世にも立っていたらしい。中世になると、ローマ時代の町の上に中世のオーブダの町が造られたが、それすらも、この地を征服したオスマン・トルコによって破壊された。古代の発掘が始まるのは18世紀後半、要塞や要塞関係集住地の本格的発掘は20世紀の前半、そしてアクインクム全体に渡る大規模な発掘は、1960年代に始まるのである。

4

次に、民間人居住地について説明したい。今日、多くの見学者が訪れる考古学公園として整備されているアクインクム遺跡は、ローマ時代の民間人居住地の3分の1ほどを発掘して見学できるように整備したものである。この居住地敷地の中央を、現在南北に鉄道 (ハーヴ) と大きい道路が走っており、考古学公園となっているのは鉄道と道路の東側であって、西側はあちこちで発掘が試みられているが、民間人居住地の全貌はまだ明らかになっていない。ハドリアヌス帝治世の124年にムニキピウムの法的地位を得たとき、この町は380メートル×420メートルの敷地を市壁が囲んでいて、90メートルごとに砦がもうけられていたようであるが、今後の発掘で明らかにされねばならない部分も多い。市門についても、現在確認されているのは北、南、そして西の門のみである。

1964年から1973年にかけて、Klára Póczyによって主導された発掘が大きな成果を上げ、さらに1973年から1993年にかけての、この一帯の再開発に絡む救出考古学的活動が、民間人居住地の調査と復元に決定的な役割を果たした。発掘、整備、復元されて、考古学公園として一般に公開されている部分には、さまざまな施設の遺構が残されており、規模は小さいが、歩けば確かに「ハンガリーのポンペイ」を実感できる。公園北側にある入り口から入ると、南に向かって順に、フォルムとバシリカ、公共浴場、フォルトゥナ女神の神殿、食品市場、コレギアの集会所、工房、浴場、ミトラ神殿、浴場、商店や食堂と並んでいる。ミトラ神殿の西側に小さな野外劇場もある。また、水道施設の跡がはっきり残っているのも印象的である。

(写真6)「ハンガリーのポンペイ」アクインクム遺跡考古学公園（民間人居住地の遺跡）



この民間人居住地では、紀元3世紀の初めには、個人住宅も公共建築物も、上の階はともかく、1階部分はほとんどが石造になったようである。公共浴場はもちろんであるが、富裕な個人住宅にもセントラルヒーティングの仕組みが完備していた。公共浴場は4つ確認されており、そのうちの一番大きいものは2世紀初めに作られ、3世紀の後半に熱気浴室（sudatorium）が追加されている。

すでに述べたように、考古学公園の中心部に、発掘された遺物を収納するために、1894年にアクインクム博物館が建てられた。周囲の遺構と調和するような神殿風の建物であっ

たが、現在は閉鎖され、最近新しい博物館と交代した。新アクインクム博物館には、ブダペストで発掘されたモザイク画、碑文、遺物など、重要な資料が丁寧に展示されているが、一番有名なものは、一般にヒュドラウルスと呼ばれる、水圧を利用して通風し音を出すオルガンである。古代のオルガンについては多くの記述や絵が伝存しているものの、実際に残された遺物から完全にオルガン模型が復元できたのは、ここアクインクムが全帝国領内で唯一とのことで、どのガイドブックにも自慢げに書かれている。1931年にこのオルガンが出土したのは、居住地の南門に近いところにある衣類・生地を扱うコレギアの施設内であった。

歴史研究者には、オルガンの模型よりも、オルガンに関係する2つの碑文の方が興味深いかもしれない。その一つは、このオルガンが、アクインクム民間居住地の長を務め、消防のコレギアの長でもあったガイウス・ユリウス・ウィアトリアヌなる人物によって、228年にコレギアに贈与されたものであることを刻んでいる。いまひとつの碑文は、第2軍団の特別に報酬を受けたオルガン奏者のティトゥス・アエリウス・ユストゥスが、最愛の妻で30才余りで世を去ったアエリア・サピナに捧げたもので、彼女がいかに愛らしい声で歌い、竖琴を響かせ、オルガンを好んだか切々と述べている。

この民間人居住地の北、すぐ外側そばに、円形闘技場がある（写真2参照）。2世紀中頃、おそくとも162年までに作られたもので、楕円形の長軸が86.5メートル、短軸が75.5メートルの大きさである。内と外の壁の間に砂を詰めて固め、その上に観覧スタンドを作った構造で、観客は2カ所の入り口から入った。収容観客数は、3～4千人程度、多く見積もる学者でも7千人ほどとしている。

5

アクインクム博物館で販売している民間人居住地＝都市アクインクムに関する英語の小さなガイドブック（*The Civilian City of Aquincum*, Kartogáfiai Vállalat, Budapest, 1990 執筆者はKlára Póczyと思われる。）の冒頭に、次のような文章がある。

「アクインクムの遺跡は、ハンガリーの文化史にきわめて大きな寄与をしている。それは、同じように規模が大きく、ひと続きになったローマ都市の遺跡というものが、地中海の北にある他の都市には伝存していないからである。この古代の遺産は、ハンガリーが過去2千年間に渡って、ギリシア・ローマ文明に基礎を置くヨーロッパ共同体に所属してきたことを証明している。こうした共通する過去を持つことが、ハンガリーの経済的政治的な将来を、そして、現代の用語を使って言うならば、国の「ヨーロッパ的性格（European Identity）」を決定するのである。」

ハンガリーは、ローマ人が去った後に、ゲルマン系部族、フン族、アヴァール人、等と支配者が代わり、やがてマジャール人の支配するところとなった。さらに、トルコやオー

ストリアの支配にも服している。こうした複雑な歴史にもかかわらず、現在、他の中東欧・バルカン諸国と同様に、ローマ的古代が現在に結びつけられていることは興味深い。そして、ハンガリーにおけるローマの遺跡に対する眼差しが、先のガイドブックの文章に見られるような精神に基づいているとすれば、ローマ史研究もまた現代の動向と切り離せないことは明らかであろう。ハンガリーの古代史研究それ自体も、古代そのものの以上に大事な研究テーマになるのである。すでに海外では、こうした中東欧バルカン地域の古代への対処について研究した成果が現れている（例えば、Richard Hingley (ed.), *Images of Rome: Perceptions of Ancient Rome in Europe and the United States in the Modern Age*, Portsmouth, 2001には、バルカン地方における古代ローマに対する近代の対応を扱った論文が含まれている）。

この小論では、本誌第6号掲載の小論「リッチバラとポートチェスター —遺跡から古代が見えるか—」で私自身が提案した「遺跡史」を書くことは、時間的な余裕なく、わずかな言及しか筆が及ばなかったが、遺跡に対する扱いが、まさに地域の人々の過去に対する眼差しのあり方を探るきっかけとなる。今述べた中東欧地域のアイデンティティ形成の研究の一助ともなろう。時間を得て、古代以降のアクインクムの変遷を見てみたいと思っている。

一方で、こうした国の現状や課題とは別に、ハンガリーの古代史学界は、古くから西欧と並んで高い水準にあることを忘れるべきではなかろう。私は、遺跡を見るためにブダペストを訪れた際、宿泊したホテルのレストランでケンブリッジ大学名誉教授（先の欽定ギリシア語講座教授）のパット・イースタリングさんと、移動中の地下鉄の中でロンドン大学名誉教授のジョン・ノースさんとケンブリッジ大学のドロシー・トムソンさんに偶然会い、お互いたいへん驚いた。皆さんはパリンブセストの国際会議に出席のためブダペストに来ていた。ローマ史の領域、特に帝国辺境の研究に関する国際会議が開催されるなど、ハンガリーは重要な研究拠点となっており、西ヨーロッパとの研究者相互派遣も多いことは以前から承知していたが、古典学全般に関するハンガリーの活発さも、この時改めて感じた次第である。

わが国と東欧の西洋古代史学界とは、かつてマルクス主義的な問題意識から交流があったが、ごく一部の研究者に限られたようである。21世紀初頭の今日、時代に相応しい問題関心と研究法とをもって、中東欧の古代史・古典学の学界とわが国の西洋古代史学界との交流が推進されるとともに、ハンガリー語など中東欧の言語を解して、こうした国々の古代史研究の成果を直接的に紹介してくれる研究者が現れることを切に願って搁筆する。

参考文献

以下のリストは、個人的に所有する文献や京都大学所蔵のもの、M・ネーメト博士から恵与されたもの以外は、ケンブリッジ大学古典学部図書室とミュンヘンのドイツ考古学研究所図書室で披見できた文献に限る。

- Lengyel, A. & Radan, G.T.B. (eds.), *The Archaeology of Roman Pannonia*, Budapest, 1980
- Alföldi, Andreas, *Der Untergang der Römerherrschaft in Pannonia*, Berlin & Leipzig, 1924
- Aufstieg und Niedergang der römischen Welt II*, Principat 6, 1977
- The Civilian City of Aquincum*, Kartogáfiai Vállalat, Budapest, 1990
- Fitz, Jenő, *Die Verwaltung Pannoniens in der Römerzeit*, Bd.I, Budapest, 1993; Bd.II, 1993; Bd.III, 1995; Bd.IV, 1995
- Kovács, Tibor (ed.), *Guide to the Archaeological Exhibition of the Hungarian National Museum, 400,000 B.C.-804 A.D.*, Budapest, 2005
- Hajnoczi, Gábor (ed.), *La pannonia e l'impero romano: Atti del convegno internazionale "La pannonia e l'impero romano"*, ACCADEMIA d'Ungheria e l'Istituto Austriaco di Cultura (Roma, 13-16 gennaio 1994), Milano, 1995
- Hajnoczi, Gyula, *Pannonia Hungarica Antiqua*, Budapest, 1998
- Mócsy, András, *Die Bevölkerung von Pannonien bis zu den Markomannenkriegen*, 1959
- Id., *Pannonia*, *RE Suppl.* IX, Stuttgart, 1962
- Id., *Pannonia and Upper Moesia: A History of the Middle Danube Provinces of the Roman Empire*, London & Boston, 1974
- Id., *Pannonien und das römische Heer: Ausgewählte Aufsätze*, Stuttgart, 1992
- Die norisch-pannonischen Städte und das römische Heer im Lichte der neuesten archäologischen Forschungen: II. Internationale Konferenz über norisch-pannonische Städte, Budapest-Aquincum 11-14. September, 2002*, Budapest, 2005
- Oliva, Pavel, *Pannonia and the Onset of Crisis in the Roman Empire*, Prague, 1962
- Póczy, Klára, *Aquincum: Das römische Budapest*, Mainz, 2005
- The Roman Town in a Modern City: Proceedings of the International Colloquium held on the occasion of the 100th Anniversary of the Aquincum Museum, 1994 Budapest*, Budapest, 1998
- Das römische Budapest: Neue Ausgrabungen und Funde in Aquincum*, Münster, 1986
(これは展覧会のカタログであるが、学術的にもたいへん有用)
- Soproni, Sándor, *Die letzten Jahrzehnte des pannonischen Limes*, München, 1985
- Visy, Zsolt, *Der pannonische Limes in Ungarn*, Budapest, 1988
- Id. (ed.), *Limes XIX: Proceedings of the XIXth International Congress of the Roman Frontier Studies, Pécs, Hungary, September, 2003*, Pécs, 2005

アクインクムやパンノニアに関係する碑文は、主に以下の文献におおた収録されている。

CIL III 2, *CIL* III, Supplementum 1-1, さらに *CIL* III, Supplementum 2

Hild, Friedrich, *Supplementum Epigraphicum zu CIL III: Das pannonische Niederösterreich*, Burgenland und Wien, 1968 (ウィーン大学に提出された学位論文で、413頁のタイプ刷り)

Die römischen Inschriften Ungarns = RIU

これはA. Mócsy と László Barkóczyによって1972年に第1巻がブダペストより刊行され、*CIL*との対照表も添えている。以後、編者を代えつつ、第2巻は1976年、第3巻1981年、第4巻1984年、第5巻1991年に刊行。第3巻以降、ブダペストだけでなくボンの出版社(Dr. Rudolf Habelt)も刊行に加わる。アクインクムを扱う第6巻(2001年)には、*CIL*だけでなく、*An. Ép.*との対照表もある。この補遺として、以下の2点がある。

Lörincz, B., Martin, E. & Redő, F. (hrsg.), *Registerband RIU, Lieferungen 1-4*, Budapest & Bonn, 1991

Kovács, Péter, *Tituli Romani in Hungaria, Reperti Supplementum*, Budapest & Bonn, 2005

追記

私がこの小論を書くことにしたのは、2007年9月の自身のブダペスト訪問を契機とする。ごく短期間であったが、ブダペストのローマ遺跡訪問は、私自身の研究にとり、たいへん意義深いものであった。ローマ帝国すなわち地中海帝国と考える一般的理解に対して、私は近年、地中海を離れた

帝国辺境属州に視点を置いて帝国の本質を見直そうとしている。そのために、ブリテン島各地の遺跡や博物館を見て歩き、ライン川流域都市やドイツ国内に残るリメス（防壁）の遺跡なども見学してきた。しかし、ドナウ川の流域のローマ遺跡や博物館については、まだわずかししか訪れていなかった。そこで、2007年9月、ウィーン大学でハンス・トイバー教授と懇談し、資料収集する機会をもった時に、ウィーンから簡単にローマ人の足跡を訪ねられる先として、ハンガリーの首都ブダペストを選んだ。

ブダペストでは、事前に連絡をしておいたアクインクム博物館をまず訪ね、マルギト・ネーメト博士（ハンガリー人の名は、通常日本人と同じく姓・名の順で呼ばれるが、ここではヨーロッパ人一般の呼び方に準じて名・姓の順とする）にお目にかかった。ネーメト博士はこの博物館の主任研究員の方で、ローマ史・ローマ考古学が専門、本文で言及したA・モーチのブダペスト大学における教え子で、ハンガリー語以外にドイツ語や英語でも数多くの論文を書いている。

ネーメト博士は、アクインクム博物館の展示物と屋外の遺跡とを、さらに大浴場ほか要塞関係集住地の遺跡をも案内してくれた。ブダペストのローマ遺跡のほとんどは、市の中心から公共交通機関を使って簡単に訪ねることができる。アクインクム博物館やその周囲の考古学公園、円形闘技場遺跡などは、ヘーヴという名の近郊電車やバスを利用して簡単にゆくことができる。ナポリからポンペイを訪ねるよりもずっと容易である。従って、遺跡を訪ねることの価値は、それを限られた時間内にどれだけ深く観察できるかにかかっており、専門家の案内を得られた今回の訪問は、この点でたいへん幸運であった。ネーメト博士からはたくさんの編著や論文抜刷も拝領し、単身で訪ねた円形闘技場の遺跡などについても、事前の博士の説明のおかげで観察が深まったように感じている。同博物館の若い考古学者ウスラ・ラング博士にも遺跡の案内でお世話になった。お二人に改めてお礼申し上げたい。また、ブダペストの遺跡を訪れるにあたって、日本学士院の用務でブダペストを訪問された東京大学名誉教授伊藤貞夫先生ご執筆の訪問記録（『日本学士院紀要』第60巻第2号、2006年1月）をあらかじめ拝読して、多くの有益な知識を得ることが出来た。抜刷を恵与くださるなどご配慮くださった伊藤先生に改めてお礼を申し上げる次第である。

（本稿は、科学研究費補助金基盤研究（C）（代表 南川高志）による研究成果の一部である。また、本稿掲載の写真はすべて南川が撮影したものである。）